阮諧一義集

三

へ 5
4110
3

門 へ 5
號 4110
冊 9-3

宮城県図書館

俳諧一葉集附合之部二

古學庵佛子 編
幻窓湖中
坎窩久臧 校

貞享元甲子年

荻白杏枯の竹の子似るもの哉　翁

たそやとゝばる宮はし山茶花　野水

雪の夕水に風呂焚ふるまふ　荷兮

うしろ姿雪をふまぬ赤ゝ　重五

初鮮のかつをの白ひかる　杜國

白のうて〳〵沖の朱を　芍　正平

赤尾ハ濃ノ手ノ内ノ
髮ヲヤヽ写ヲ志ノ小角ノ
伝れつゝと乳を志ノ十ヲ
清ノ卒ノ塗ヲすこしと活
かけ浮れ焼き小く火を焚て
何ノ八釜ノ手ノ角ノ
田中ノ小まへ人ノ極ノ
方ノ舟ひくく人ハちんゝ
たゝの紙を横ノ後ノ角
陳さゝき河ノ
二の尼ノ直衣の花の先ノ
撥ハ篠ノと志ノ
水翁玉五号翁玉五水号翁

ノ物ノすれすく旅鞄ノ赤
今了ゝみの矢を多ノ
ぬす人ハ祇令の松に吹れて
志ハ家程の名を付
笠ぬ如て学程ノ
あゝのれかゝひゝ
志ゝと砕ハ人の骨ノ
鳥鐵ハ夷ハ
あゝれすノ
秋水一斗ノ
日東の李白ノ
中ノ赤稀を
翁玉五号翁玉五水号翁玉五号

ナウ うしの紐吊すまゝの夕かほ手　翁
篁に鯲も魚といはへき　玉
秋の野のさゝめの星もしらへく　兮
名もそれもとの手向のまゝけり　水
饅頭ひとつ居間に賀の花漏て　玉
郭公は最中ふけ待しかし　五

おもへとも壮年いまた衣にてほさす　野水
仰ひて杉より落しも侍し怕る　杜國
露きさまさ尺る節の時の食　翁
笹の葉かさる蝶の羽折て　荷兮
しつかなるふけれとものまなふ　兮

庭の月袖も鶉翁を吹ならむ　重五
桃花を手折し真流の宿　正平
ウ 雨にぬる浮身の田螺折植て　圭
秋くのきさし紀を只凍子ふる　水
床更て餅飯ハおもふ男　兮
暮されし汁のうしみ時わし　翁
口をしき霜をちきる力なし　水
ゆかれかしませ前をおとさん　玉
小さなきさのかきをしを一つさし　翁
月を座きつれ牡丹めりよ人　玉
滝あゐみのかちか八作れ堅落て　五
いけしとのみ地萩きる所　兮

秋もの幸とや嫁はいの先に
先はくらはれまてかくゆき　水
[二]桂宮に餅すゆ宮仕のかう　翁
うくひす起よ残雪ともに　水
簾涼く楊そ柳の軍さい　丘
三線ゆうくんの不殘の軍人　翁
色すくる美濃さ赤うる琴を意う　丘
紙さ先しれさてさて七十　丘
なかめよ法華寺山　丘
ひくの傘のこいとうさす　芋
色波ゆ後のまるあるみまるの　水
きうくよつうる雨れを　海

[三]有ちたる白猫の髪の毒のあさ　芋
毛きぬ雑巾海を　翁
[四]秋深は蕎麦赤きく新さハ　水
蕎の穂つふ東方の里　丘
秋よ祝をひくき山ひ子　翁
ひくハ典仕の唐う内付す　丘
三ケの也鶏野尾長はる軍　丘
うみつもも越の猫信苔　芋

杖をひくとうの子十歩　杜國
清みうひ海ゆ宮子霽小　
小ふみ泊く手ふれいふつ月　重丘

首途の紫をも釣 旅人の足や痛ひて　野水

小の御門をみし 附けの寺　翁

月業操作して 紺のかうすみ　荷兮

菜の酒君をしむ称で色のたんせて　正平

ウ

らうけつ物よむ娘のしつゝて　五

蛇籠ふう河す情らし 手原　重

玄萩の角力ちつのしをえし乱れ　翁

萬ちきくまし 淡賀来の 坊　水

約月 秋双ふおよ 船かゝしく　兮

みをむ 買 花うけつきれさく　重

鬼ふ寺の 葉らうく 縄を 佩う 庭　水

扇 婦の 果よう 米あんと 安　五

二

籏まくけ浪の ふのすて 崩れけり　兮

佛 ほつう 魚 汗くむ らう　翁

雛ふる 地見二針と 作のれさ　五

玉 形す ら 燃の そうけ 六 反　重

く 縦 し け 蛇 ふ 雲 を 危 ら も し と　翁

吉 屋 の 百 弘 あ ふ さ す 深 し　水

家 殿 や 足 絹 の 橋 の 長 お 松　重

鹿 庭 の 松 を よ み と か そ ふ 姫　兮

松 し 子 ハ 栄 菊 よ け の ひ つ る ん　五

三 十 日 を 言 く 力 う る 年　水

宮 の 粧 呉 茶 の 笠 就 ら し き　兮

襟 ふ 中 言 解 う 尺 袖 を と く　翁

いさ人と持ちと指す欲ばさん　玉
けしのひとへちりそこねけり驛　風
三日月の東そらしく鐘の聲　翁
秋湖遊て野えくます春　水
宮下女をゆるして御自を放ちさる　風
ありよ念佛藪を論する　竿
新しく紅種けしに起儀て　水
柿ひらめくも萩の常引　玉
この露玉しひものゝ落ち入　竿
世雪ならぬ客も粉ふしく　翁
難波浦にかしく火さくなれ

すゝけされど　重五
岩しまの松のつ露のそ逐つゝめ
人の顔ひを鏡磨く　荷兮
花菻る骨のかわらず吹こす　杜國
鳥大るを此角の手すりし　野水
風吹ぬ秋の日雛子遥なる　翁
萩織笠を常に振する　羽笠
かも茂川や柏麻に代衆徴きみ　竿
いそろうの舞をつゝしの花　玉
思ひきて布播高う咲れさ　水
うちそ二十をこゆる三年　風
拵ろまてうゝのこときしの都れる　笠

火葬ぬ火葬ゆる人をつかひ
門すの内ゆ我云ひて内の
血刀のくすり内のうち
雪下て女御の御七夕
をまつり給ひ
給ひ桜の御
給ひ物いくすり歌をのむ
白菊給ぬ内を使ひ
宣旨のことく飯を
八十まを三つ尺童母
まつしらを七夕の
原内ゆ桂の花をつらむ

菊正
芋
水
玉
菊正
芋
水
玉
菊正
芋
水
玉

菊ゆ
殊の家ゆ使ふる女尺ゆ
物瓶ゆ栗を使ふ中の
体り来ゆ掛ゆ
つくみる内ゆ
木の日は自を
雨かくは
つくし南京の
尼ゆ
術ゆ
物云の
小の分ふく

ト木ゆ
女尺ゆ
芋
玉
菊正
芋
玉
菊正
芋
玉
菊正

[illegible]

田家秋望　　[illegible]等

雲月や影のつくし[illegible]ひて　　翁

[illegible]の[illegible]れあるかうかう　　重五

[illegible]橋山家の[illegible]　　杜國

ひぶすする牛の[illegible]て　　羽笠

[illegible]　　野水

酌とる童[illegible]にいて　　翁

秋の須旅の[illegible]　　等

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]の[illegible]　　[illegible]

[illegible]の女五十　　水

[illegible]の[illegible]　　笠

[illegible]　　等

[illegible]　　翁

[illegible]　　五

[illegible]　　玉

[illegible]　　笠

[illegible]　　水

[illegible]　　翁

[illegible]　　等

[illegible]　　玉

御幸に進むみのみくるま　玉
鎌倉思ふ寺の小角豆のむしろかし　水
萱屋まばらに炭焼つく〔?〕白　笠
芥子の尺の小坊主しやおもむき　兮
折る〔?〕葉の宿を[illegible]みくさのみ　菊
静まる飯釜のうへく月の宿　玉
秋寒く瓶風や[illegible]しき　風
物拂ふ松子のみえる片庇　笠
豆殻つくりて母の表に入　水
元政の字の[illegible]も読ぬべし　菊
從兄木[illegible]の[illegible]れをとらへつ　兮
いつ染む男猫ひとつを抱無き　風

春の末つすみや掃きとよみ　玉
[illegible]干をとまるの[illegible]やかや　水
山茶花白く笠の花かゝりし　笠

同

いつの人ともはまらぬ生をおかし花　羽笠
[illegible]火の[illegible]枯原の松　荷兮
木[illegible]の下[illegible]を[illegible]しき　重五
[illegible]宮を西川に[illegible]　杜国
狼に[illegible]かそん月は海　菊
ひよりに[illegible]すゝす岐阜山　野水

同年臘月十九日　菊

海苔の中の春の色白し　桐葉
串に餅をはかる　鶴
二百年系図に山を斧取る　東籬
稚の種まく秋を惜しむ　工山
入月の影はかりなる忠　紫
かなをまぶしの家はなれゆく　菊
海苔の中に老いる母のあるさまと　山
一輪咲くし苔の　蓋
樵の工丈二ねとらしる国をゆく　菊
月を惜しむと狐あくなり　紫
雲生ずる河原をうつる宝　蓋

美人の入に　山
笠をかぶる衣の砂埃て宝ある　紫
秋の鳥の人笠をゆく　菊
をうつしの壁の陰の清流て　山
夢れ雲を訪ねて　蓋
おくもる石の扇を拾ひき　紫
美人のかしらあむ訪ね　山
二　城夷の舞の家樽を使て　菊
生海苔かまうも猶ハめれる　蓋
木の子の雨を海苔の壁をくく　山
藪を屑の十をうつ大ゆ　菊
をつくと地孫化る紅父ひく　蓋

京千為重し　痛のまし　紫
不二の根と笠を　ものの　菊
霜ふる山く　野のひと　山
中つ芋を　筵を見ひらき　紫
れうつく小姓　菊の戸を　押
月向くみ計　のひき八ツ　山
根いそくきく　のの　菊
[illegible]れる　昌吳を　ける　巖
言　鼠の粉子　文　仙　紫
紅葉の　紙子　花の　を絞　菊
ちひさ　小言の　永　伽　山
青面の新　書家　標　菊　山　紫

まさ子ちす　子　の　撰　新　菊

[illegible]の　[illegible]　面　[illegible]　秋の　[illegible]　雷枝
芝　[illegible]　[illegible]　の　や　[illegible]　菊

[illegible]の　[illegible]　[illegible]　菊の　角　勝延
秋子　[illegible]　[illegible]　蝶の　[illegible]　菊

河の　猿　[illegible]　拾　[illegible]　本　[illegible]　嗒山

すきまより雪は降四十一　翁

雪ぞ降おもかげ帳をえをゆ　如行

古人のゆゑれ夜の本のうし　翁

翁義淡く去こんとゆのうれハ　桐葉

檜しを雪をいのちのやうゆ　如

行一つうゆ足法みゆく　翁

去のゆく枯く餅のふやうのれ　翁

去りひとうる根源大根　桐葉

雪をさく後る雪れゆ一一翁

本葉を笑を吹おろう　弥　閑水

はうしと猿蹴るれ多の木く　東籠

手のうるゆと伯母のはは一き　桐葉

氏海を学難　拾ん笠一うれ　翁

むくるうひき波のかく　嫁　桐葉

木枯を知る氏のゆく付く　東籠

叩端
如行
工山

木因

菊

貞享二乙丑年
三月廿七日

叩端
桐葉

菊
端
葉
菊
端
葉
菊
端
葉
菊

煙火 風を志のふ 紅葉 四 湯
川波ゆく鷺を角に張りけく 紫
今利と云ふ 鐵を彩のうつふ 翁
加しまる 雨の降せの花の花久し 湯
雨打て 酒を とうくる 鶯や 紫
二 雲よりみく 如 春おろう 翁
枕 扇風の 絵 絵 湯
ゆるし 菊のいろうの 老さう 紫
三 殺の 舟 水 川の 秋 翁
尾 仕や ひとう 杜律を 味ひく 湯
花 うう 竹 の 葉 紫
ひるる 時 ハ 吹 を 秋ひ 翁

水 波 小 伝 油 ひ ゆ う て 湯
月 ゆ く 歩 板 ふ を 角 ふ ん 紫
ゆ ハ 花 浪 の 仕 ふ む ふ 翁
村 角 の ふ き 粉 く ふ の 岩 湯
ひ ふ 兎 の 瓜 ゆ ふ 和 と 紫
三 尺 ゆ ふ 八 八 羅 ふ ふ ら ま て 翁
男 や も 兎 の 赤 て 世 き 湯
風 ふ き 大 寺 の 秋 の 七 ゆ 紫
法 門 を ひ く く 生 鯉 の 養 翁
学 磬 山 学 磬 ふ 助 ふ 有 笑 て 湯
養 ふ 弱 る 生 要 法 の 秋 紫

同日

つくしと桜の色み深くちる　桐葉

ひゝゝ寒さとつもる蕨の一家　菊

夕影山吹の雛と移るゝ来る　四端

清き多をすゝふる梅杉の月　黄口

枯もしらき吹きもとゝ鶯うゝ仲の上　東蘇

高のち寒ゝ撫ゝをゝうゝ　工山

鼻就子杉の遠寒を仏く　菊

寒ゝ大陸子三軒の隆きく　端

寒と俗漁の蛙ゝ舟と尺ゝ　山

寒ゝ鶯ゝ鳴ゝ四五百の去　紫

杉風のひゝきゝ酒を飲薬し　口

佛をきゝもむ百合の信　南

鳥羽玉の数きゝ女寒ゝ来て　端

逢をゝ夜ゝ仏ゝの月　菊

秋八新只青ゝ物ゝひゝう　紫

白子の古文　系方の海　山

浪ゝゝう鯨の骨ゝ義ゝ　義

波行ゝ於秋のかゝゝゝふ　端

二望持ゝ寒ゝ立ゝやを男　菊

五寒の塔のゝゝゝゝゝ　桂楫

鶯鈴の屋ゝ蛙の囲ゝ掛ゝて　端

風ゝ多ゝ寒ゝの付　紫

筆ゝゝゝ杉の度寒ゝ引撓め　山

酒を多くすすめ抽大そをする　菊
おのづから安らかれのくらをあつのく　口
身を捨て世を思ひ風のよりけり　菊
白のものの物ものを解はなをて　紫
おほん帰京はみを占ふ　山
龍龍の赤みを寺の月遠く　菊
鶴多の棗は何を寺のくうち　菊
燈籠てまさ沼柿の秋の世　山
さ家のすうすの尾の影　菊
長ものの物焼く物物　紫
入りの沼の星二ツ　菊
言ものの酒をけつさ花のれく　菊

つしれふまを月ふ西行　楫

同

牡丹芍薬を深くさひかり雪の姿　菊
名月清しく家の玉簾　桐葉
亭紫をみ多年あうけて　叩鶏
行人く解を作いつ無る　菊
新家松を木まぬ板の面栗　紫
二百ちうひをるれ義丸　燭
たぶさ引沼八中秋の男同士　菊
浜を沼の人うけ　紫
竹蜂のすをとを月の夕霧　燭

菓の實これ世くさの魚　翁
手ふてゝ手まあ無の一年う京　紫
からんのうてゝ市　場
うすうき蔦こたゝむ紙の屑　翁
砂のたゝれ合ぬしゝ葦　紫
うゝしとさん風の篠ん　場
谷吉風をうつく舟の出百　翁
花表てをゝ尺この角文金　紫
蓋の泥を義す肩云　場
出代の縄さけふる杖子筋　翁
手みのなあしるる風出　紫
地雪火手遅て浪の赤もり　場

修の樹を多る枝柳　翁
修正みて盆の宮ゝ義子椽　紫
てすれて遊ふ飯の焚ふて　場
お菓義の面ゝ却もひて扇安　翁
旅の先食の奪る小宗　紫
物宮ゝ彼へ却ろゝ上勢　場
孤の言ゝくゝ巻の燈能　翁
場場のうけ面てつる身の言　紫
風注和る言の白砂　場
椹義ゝいこ川ゝふ付写入　翁
義ゝてゝ兵を修千出　紫
徐口の焼てゝ口ゝ椹酒　場

海さわの枝は長く本宮　菊
花盛りて雲のまゝ紫引殘め　紫
うれも角　紅葉は嶋生　瑞

同　菊

物もひを木ゝ四方の板物　東蘇
京の秋つく咽の長喪　桂楫
生の子は氣をのむも新宮　叩端
かけろふ長ゝ竹の海棚　桐葉
俊つゝ栗の毬ゝ絹ゝ　工山
ひゝゝけさゝ物の松　友
蒼ゝ生て淀の夫雪を海苔ゝ

狂歌の作者と呂　このす
事殘千家を作む女　閑林
ふ付の市上の能う法　楫
蒼ゝつ殺生の蒼戸宮蒼て　紫
ようを立本はきしるゝゝ　水

同年六月二日赤武於石川無行
海さの潮ゝくるゝ女　清風
青蒼蒼を尺ゝ約月　菊
松風の大ゝを笑時家けくて　嵐雪
酒店の秋を傳ゝゆるき　其角
社の青ゝゝ蒼蒼の燥ゝゝ　才丸

昔 懐 作 く 香 千 志 し く　コ 廣
ちの 詞 を 今 い 千 や ま ー 寅 え　素 堂
種 を 花 あ れ い や う ひ の 雅　風
売 て ら ま 付 ぬ い 志 を 乃 ち ち　菊
ゆ き の し と う ち や う ち う　堂
ウ ド 原 の 山 こ い ふ 家 の 新 ま て　角
ゆ 宮 梨 も て ま し あ ま 父 の 三 年　九
家 新 ち く ち ま れ 自 慢 の 一 忘 屋　角
舟 て 亦 し い の ち ぬ き ち ふ　堂
面 を ち い 妓 き 火 い く 姫 ち し　風
年 花 ゆ れ も 文 を 十 年　菊
既 て ち 基 て ま れ 人 き ゆ ま も 歌　堂

時 雨 く く 白 眼 も ち ち 花　角
映 稲 荷 千 ち ち の く 此 月 ま よ　九
降 猪 猪 ま ん 為 の ち む 秋　富
樹 の 実 此 傾 ゆ 年 筆 新 年　堂
く し ち 天 を し ち 美 婦 好 き　風
花 為 の 五 ち の 風 絵 い の り　菊
小 京 を き と 九 ゆ の 書　堂
三 尺 の 鯉 て 小 能 て 料 理 の 品　角
ち や 魚 ち ゆ を み く む 吠 し　九
歳 四 の 義 ひ い 筆 を 笑 中 氏　富
逝 水 や ち を 拾 め ま の の ハ　堂
白 ち の ち ち く 河 を の 十 五 日　風

支離滅裂の更に嚔しく
張のすくみうるしの黄色を
を一息おのほとを二羽しら
殘造り鳥播の羅を指をれ
きぬ〳〵の衣薄むるて注
吹のゐれいつくしの人のさとのや
古梵のせうの紀義四をむ
ひろ〳〵しれ者張る寸身人宣
引板と業こをのこ番く
武古のものすきまき鐵心
七里法寺の七里秋風
四三の雷南北雨と化し

菊 壹 角 九 高 壹 風 菊 壹 角 九

槻の小ろ〳〵きく紅ろ〳〵す
陰陽師の篇ろ寸寸の仮屋建
狂女さドようふ紅寸ろくふるる
情しうろ月ハ方金の杉てろ
桃く味ふ出羽の鄙
宝有のろもつふうろ寸月
杉ろ寸あ〳〵しのつのろ萩萩
物毛れ業ろ起陽を宝ろのみ
三里ろすろ不二いろ寸ろ月
屋ろ物ふうろ次ろ寸かへろ
寸ろを紙る小の海ね
三陽先ろ寸寸ろ稼位く狭ろき

菊 壹 風 菊

低水きよむ五郎入道
悔まさハよ戸を後るかくこと
をもちもしてうの風の後る数
伊勢すれ河柳の数八重しを
入院人家の長う砂ちゆ
一陽を繁正月をやう来て
海猿よりくりやう
深度の浦をあむ
きのふれみしれ癒まもし
うゑ幸とふ紀川竹をそのめ
名を河内坂をうさ八
后の月家を入尉ある史

雲 角 九 高 雲 風 角 雲 角 九 高 雲 風 角 雲 角

うけきさひしき五郎の横来
みの法れ独行つ
恵をう紀をう塚をイむ
和名れ石西四をし
小女郎小まんる太粮戸ろ
西をそく起信をけ鶏
尺よすの母の川八面むき
海河の柳とさうの新清
河源ううし懐る管
さうれ旅宇宋を紫ゆく
ふうこさうる小狩の中山
故花をそれうる月の見河さ

風 角 九 高 雲 風 角 雲 角 九

[illegible]ん何のしら籾
[illegible]ほせる舟のまとをも
[illegible]の岩をいろとる
名 きれたる乳人ら魂ハ[illegible]
麻布の[illegible]ほそ[illegible]
[illegible]の[illegible]
文治二年の[illegible]石[illegible]
みされ数俱[illegible]
[illegible]かよ[illegible]
三日月の影[illegible]
秋ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]神[illegible]

角丸 富士 風雲 翁雲 角丸 富士

ハ一眼も[illegible]ハ一十[illegible]
特の[illegible]
定家[illegible]
位く[illegible]
相の[illegible]入の[illegible]
ひ[illegible]を強[illegible]
[illegible]を惜ぬ不[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]

角丸 富士 風雲 翁雲 角丸 富士

筑華園

梅さくらしきの中をぬすまれし　菊

板葺をすする生二ツ　秋風

秋さくら事皇さく枇杷の葉紫　秋風

笑ひ　山茶の　も　菊

ものの葉　板　絹の　葉を　きく　湖春

櫃の木は切り　かれ　かぬ　姿の　面　菊

家　すり　出　を　はらひ　て　ら　秋風

物　陀　ら　ら　ら　し　梅　今　何　な　湖春

寺　の　寺　社　蚕　寄　り　つ　く　菊

巣　の　中　ら　巣　の　色　の　巣　巣

かり　ら　紀　の　杉　そ　ち　り　紙　ま　す　菊

山　ハ　さ　ら　ら　を　役　ら　ま　面　そ　形

芭蕉翁り御の供

ら　巣　よ　寺　後　ま　し　く　ス　三　な　如見

巣　ま　て　ス　和　ま　寺　の　和　の　玉　菊

貞享三丙寅

御懸帋

日の春をもきさみまつの子都のゆゆみ下　其角

元彩のうのさを梅のはるさきもく米事也

古ふるけしきを都のゆゆしたるみてゆ

つくれ竹の殺さくあるはるの流るるを

ふる紫越ぬまに

みきりに字もさきの梅の家　文鱗

貞徳先人之服仕ゆゆしとうれ竹れ

ふる当対八古くあるりて系事をとる

ふるをとうつしまま梅相をくをこ

本形のまに枯ふる家の梅ふ竹ふる

けしきを紫ふるやうに梅の家ふ

梅の本ふいんを用るのふる元彩ふ梅ハ

先ふを木かしのをまれもをの

ふるかをふ彩ふ月ふをふるハふ尺仕ふ

仕ふふ但梅の家ふ附ふる新ふ俳

徳の本元彩ふ形ふ仕ふ

ふふ村ふ梅尺ふ用ふ梅さふ

牛ふの仕ふ牛ふふ風仕ふ白ふ仕ふ

豊白の春ふ外ふふめゆ梅ふふと

ゆれハ年ふ春ふ不新ふふふ村ハ画の名

華ふ梅ふふふ牛梅ふ尺ふ画ふ　松風

[illegible]

大切し

酒の幔子入運の月　コ齋

四月月ハ[illegible]

[illegible]

秋の山[illegible]　芳童

[illegible]

[illegible]

秋の山と大中[illegible]

[illegible]人[illegible]

炭かり[illegible]　松風

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]人[illegible]

里[illegible]の麦[illegible]　仙化

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　李[illegible]

見ホ者之仏を付ることもあく仏を
信ずることも知し里しの表としいひち
よ旅仏を拝もへむしむりみるなと
うるハ一きよう寺を保一仏ら寺等
毎日字仏よ多郷

蓑白

ウ
郷まるさ三毒とあむをあれハ
うれさしうるのもなくて仏者の心源
く思ひとてうあ一む故仏し筆報
あるもそもそして面をうひる心法ひ仏
念仏そり牡の仏いりくうう

朱弦

ものうりの無をけいしくうう無
社を仏者をいもものし家侍の仏も祈

あるを牡仏くこの角ハ所本ゆう社ちれハ
を面る里の仏さようくさと
法まーくまを家の無をさきをすん

蚊足

まをの無をさすす陽まく仏し
度し家人のをもゆるのまし入
仏まく仏る
かりりおよをを本むり松の有

石里

ずるを面ようう家ず書家ず
軍情を拝ひうをうう
ま的の梨歩島帽ま家ける

箱

陽船家家ず一赤白耳のうもし又
一白文ようひまくう耳を梨ず五年

まことはしらひ付やう粉く一よし一句
の姿を自眼を付て尺くべし
しき斗付る事を家の尺おさめ
前句を懐中して付る句こそ深
しを見るべしこれ却て世を捨けれど
ころを借らる欽慕て
みくまれしたの本轄の前渡す
家ハ只酒もりとこれらハ世を学お
よりたの句を借りる本轄のもの者
多くあれこ季節のものはあまりして云
より情緒しとこゑ文字を害する處
の句作を感情いり

桃華

文鱗

後住女きぬしらるし　貫角

撫住女ハ後ろ姿の妻しだんおもしろく
まれしとこころて深の物を和さる
時ひをこゑうて襟おしとかくぬさる
千万の物みなひつるみの付る趣思
はつやうし前句をのそさし数味深くれ
山深み氣を乃む猿の声す出し　コ齋
猿ハ里水を濱海おすお深くよみ侍る
むし峡猿更科より飛なる山影にも後住
站を山影にはしりひるらし氣を居
猿しころし女とこ字をはしりひさるこ
かすの子る意味志てのもよく通しけり

[illegible]の[illegible]と甲斐の笹とも尺とる　松風

[illegible]の[illegible]出[illegible]きて山川のそけしく吟

[illegible]き御を新宮[illegible]分新出山[illegible]を

[illegible]

法の出系利[illegible]を[illegible]ん　松風

笹の[illegible]きを尺[illegible]の[illegible]

[illegible]を[illegible]と甲[illegible]と六古人佛出

の[illegible]自[illegible]学[illegible]と[illegible]

[illegible]利[illegible]を[illegible]亜化[illegible]新く

[illegible]と[illegible]

[illegible]の[illegible]れ記を[illegible]の[illegible]の戸　茅宣

[illegible]新[illegible]

[illegible]

[illegible]ものの[illegible]　李の二

[illegible]の[illegible]

[illegible]人の[illegible]

[illegible]出白海

[illegible]眼を通し

橋八小[illegible]を[illegible]ら[illegible]　仙化

[illegible]の[illegible]

[illegible]を尺[illegible]笹の縁月

[illegible]六安[illegible]の[illegible]ものも

二　[illegible]　[illegible]の[illegible]　朱弦

[illegible]山[illegible]の[illegible]く

[illegible]分新[illegible]

此句ハ岡柳と云句の跡にて彼られたる寒山
子先生る姿情をれなる事しき大切な
なり秋のみに見て是なし跡とおもふす
其のうつしたる作者の悲情なるへし

志ら川のうけ酔て蝶をとらへる哉　峯白

白川の上なる事を興しておもひたる句也蝶を
取る事ハ猿さへ興したる作法よ面白し

庵なら稲子さらつる翁かけ　千里

此句附和の骨をかなる句して面白れ
蝶を題にて左ひする句にて蝶を取
事といふを諷物して作したし庵なるハ
林帯公の下安のもの蝶とる事といふ

に深き標裡に皆ひろしてかすものゝ
旅の興さて庵なる旅のて趣ある
さへ作りし句長さて大ゆるし

元さら眉をかくはきぬし　翁

翁明といふよう古きぬし常の事也元来
眉といふハ翁すとして志とけなる作也
伊勢物語の風子庵なる句ら大きな
ところを此句の作情なるへし

けし咲て情子大ゆさ眉子の朶　松風

元ある眉といふ子老きさる人のおもらへ
て鉄の家なとにひきてあ作る作し
けしなふるものふさ上つのさの花よハ

中れしを手取かへて白をかさうゐの見
おのの白うし桂あるをのゆ〜しひ白く
ゆかるゆ〜し

紫　の　風　よ　を　蕗　き　く　よ　入　コ齋

をんぞ切とうてく紫を初〜おの白氏おう
〜く武士のゆ花若とゆをゆ〜き物う
なと見付くゆ仕し大形八物侍なしの俳
を取り〜しくゆ白し成八中持ゆう人の舟
花く小花を入侍舟をゑ付くうなよの
なめ〜ゆうゆ見ゆをんれゆをゆをゆ
を八ゆうゆをゆ〜ゆ付くゆを素
とや〜きの

かく花とく〜ゆのこうけうる狐罠　艾角
藪うけのうさうけうしとゆ〜ゆ付うきの
もの紀風情をめゆ付く見うのまに
いい拾くうの陰心を出〜
ゆうき月和のくもるかうこうさ　久鶴
その和の遠浦ゆ仕をとこの〜付う傘ゆ
要海ゆいと無ゆうきのゆ月きえと
尺ゆうゆ和ゆ〜ゆ〜狐罠とうこうの
ゆ付付うハうゆ〜

石の戸桓龍ゆの付ゆ〜ゆうみゆ　茅白
要八ゆを要ゆうゆかゆ〜ゆ風冷〜
ゆゆうゆのゆうゆかゆ〜藪ゆうゆ

異ひとしく昔八尾不の出一十一張弓
次方の滿十市の里芳野の里玉川なる
附く作者手伝く作ゆゑ其次の
源原重ると不二なる史料と自作を高
財八白の形宮ようく先生をどいたす
ちいはのるし

三代の刀つ張治　李二

白後市の奇特し鞍馬人しいび
作くく作ゆる吾ものとおもの作るまり
石の戸樋なとて一張治をくこ
よきくく孫宇し浮きゆ秋清を水なと続
ひ名剣を少くまし作ひよう一白蔵持

おこふ代と云うて粉骨の張治の
名人とそんれも

永源八重しく松の風　仙化

永源八重しく財代をいくんも張治器人
おほく八貴ものし伝さる数を
いるしおの白きのもゆうすの作る景
よく少き付て数味まく

近江の国植名み波手取りむ　朱佐

古代の作し金さくとうう昔とる白
昔八物金物ゆうくくくくきの
人くくを作くく作る多波近江ちうを不
ま国植なるの風作をを異をくく

夜起て　芳重

月をとる舟をこがるる白しみ波をはと
一ぬをうらうらしかもをゆくをひなしすら心
おもしものちうをんとく起てしら白波
舟子　芳角

月の海　月の海　しも
月も水を海なるにうの白海と舟
ゆうの海なとしさる風俗物しさひ
うけぬ舟をうの海をもとすハ系芭の為
さしされハさひしらあ物をおのうこ物ひ
ようしら又俗世の逸士し
月愛やして人の娘をとつれさく　李白
月白遠向白伏分ぬ物し異見さる船

中に俗人の娘なし空さく月の海なと
さきしら化元逸ろ新し幾味さくし
松浦の海鳥女をとしたい庶八恋ろ舟の
夫なと皆取ろ心さくしかのつう筏
宮人のそはひ伏て舟はかきろし
陳勤　松風
の書くしかもい歩ふし
此白立ち白ろ白はれも色ちの衣を
よういひ粉ろ白こたんて行ろ
ろ月を天下一白ろ仕ろ逸白
不芳
待　このひの陸八隋ろ学の中　翁
陳勤の書ろ学月八親ろ書粉か書なと

[illegible]

友よふ　蟾　社物しきの　春　仙化

友采蟾を供物にする件むくの体
物淡きこころさり香白こ[illegible]
ようくうけらうきあるとうしゃ仮
おふ[illegible]をゆしひうら
雨さくそいやしうくうく敷墨　コ斎
蟾の形ときもの四尺の体をこのくら

雨と付うる所ふふといへども敷墨
所しきうる形ようこ何ゆ[illegible]
ようみ付る過てりなく形し古系古付ま
の用形しなくもも志ひて名白ます
ううううもの[illegible]付れいさのとしく　化
門　八幡　千　孫陳の寺　岸白
鄙の体ゆ八ふ流ちなるの門ある毎年
湖なとあうみうる体年し墨ゆ年
と附うるすへ作者の墨ふ心ひうく
理西蕃て千物ふ[illegible]武者ま六七蹄　芳垂
古自蕃処て海まの軍ふれう体民
屋寺中ふ押ふく狼藉しふ紀西め

されはこそ行きて一無の中にも松が枝や
うすき安楽の心を見有りてしやは人を
句を作るべし

何かし其の 牧 は 浄 こそして 其角

おかしの様をよく覚るべし其る乱を
かはる武士の体も外もしろし三句の
まはれ句の気のやすかる句の新しきと能
能眼もとももべし

野の一夜の夕月をと有るはうき見て
たんし陰根きのしく暖る野を能
ひまなのし体る架しの和功者の心付くき
すしめるきひしお野の一葉をと其角の

文鱗

よき人の袖の紫の衣の入日の新を帰り
まき人とよめる月我がはなれて一方を
仕立てして出留を本意と用る人は
持られとも俳諧は素手の詩をよろしきは
かの月ひゆれはみえてとも句を幸
千句の作情を用るの先祖と

乳の 餡 色 秋 寒さや 有り 李下

後にの家をむかふる月夕にも千絶
さひたくのりて見る

稲妻 み 木 の 花 の ころ そ 嵐雪

大きなる花の降りて亦のらし乳仍よれ
花すくのうき森の木百を編まし本の下稲妻

おもしろし律ぞ秋の萩の花もまじへし　松風
清さまよ聖聲より發を翁
此句の付紙一句又乗延て物淡く闇の
萩の錦盡にのしとゝする聲かな聲聲
此る作を此新しく挑作の中にこ足
あれとくまり侍らん

人はまるき年とる物をとこつおけ　揚水
此句又秀逸と聖の府ころみさる萩を
大海の萩けさひ付して気調聖ハ
此世所ころひさころ世間の人ハ手ふれ物を
かへりさそうの作を此貴新しおゐるの心
を知る和新く鑑味すへし

酒のみやでもむ金山ら洞　末弦
金山ハ系野の大学しおゐをとくらけ
ころ註を尽す付紙師うらし
右者簾翁の語と高野の作法の元味於ほ
ろし新く八句をを翁し既んやと付れ
只無手加筆し如て説今の庵翁抄稿
恨ろの五十韻まして筆をとらちまゝ

三
此ゑみ武伝を名翁ゑ語す云き　安角
系す汲する醒の井の者　二宮
玉川やおのしこゝみ宿尺ヽ　翁
にほしし手まり比乃り　他化
卯の花はこれ精そもよ見ろ作　芳童

かしこさハ在かくしよ法　杉水
南むく葛西の畑の霜きしさ　不卜
歌と棋とある屋のつれぐし　文鱗
餅焼くあたりの庭に茶をたて今宵を　杉風
築子賀して秋のくれぬる　翁
鹿の音をこのむ人もなかりつる　朱絃
あくき男のいひのなすむ月　不卜
篠の雨夜七里をぬれてすむ　李下
伊勢河内のあみ川つたひ　杉水
寺 名なき米つくる身なれども　其角
梅ハさうりん院しをも閑　千春
二月の蓮葉人もすさまじや　コ斎

姉まけみ食むまの軒　芳重
胸ゆへぬ我の絲を織るゑ　翁
ぬきむひはしきて芹は刈さし　杉風
蓑の笠をときのこみ気でたゝへ峰　文鱗
木魚中ゆる山うけりしも　李下
団をやうし体むる錦月夜　コ斎
萩さしもはす花のつれはひ　不卜
つけ射寄と糸千気を付て　千春
ころものしもん安ハ娘あかう　朱絃
三度端芽咲のさそうよしみ已　仙化
はるし八茎の芽のくつき家　李下
名 賀情をとりまれぬきのなふりし　文鱗

[illegible]

芳重
岸白
コ富
映水
仙化
不卜
李氏
柳水
文鰐
る素
映水
女角

[illegible]

コ富
仙化
芳重
柳水
女角
松風
映水
不卜
岸白

[illegible]

吉庵

城あるを友をさそひこす喜　翁
かれハこの春の葬掃墨　〃　甚角
すしといきる一軒の酒　嵐雪
身をれて煙火あるを海の上　翁
咲の屋根の咲ぬきのおと　来
生魂を給ひをく羽折り所　堂
宜位ハ〻〻美女百々き　角
提灯を大墳墓の雪ふみ　来
出るを宮の材木　翁
ふるさとハ雨ふる竹の背戸　角
清ちりぬ板金物をえし　堂
他人のあり行ち氏を拾　翁

行て付さう巣の堂　来
峰迄ハ今もくの犬の影　堂
軍の加減うきを長おひ　角
士行とに心をぬ月もぬ　来
阿生くうけて旅更の帳合　翁
面倒ハ俗を清ちはうし　角
小姓法ぬく葬礼の中　堂
丁寧もまうく法ぬ林袋　翁
数ものとうく法戸の法蒙　来
気まゝ世のしかうの財ち　堂
ひらくふやさし竹の夕月　角
冥加ちう衣食すめるお縁元　来

毛穂を一きき立るのそよぎ　菊角

そらゆる庭の白き十五夜　東雲

ゆきて今の時を酔さめの月　菊

きりぎりすいとのそよぎの音ばかり　東雲

世にたくましき筍の形ぞ　角

つゆとても南部の使ひ燈ゆ　東雲

四の緒を急ぎそろへる家の子　菊

鼻つまむ屋ようの生者　東雲

乃ちそなきけぬるのみきり　菊

縄きれて篭本ゆる花もちぶ　角

おもふ心葉のそよぎけて長ぶき　雪

三月廿日　翁

春吹き七ゆ部屋とこの風　清風

惜さ世社わしゆ和橋　岸白

足袋未を書ま水茂して　蕉良

朱一弟を陳ハ家ゆこ寿の戸　口齋

枝尺ゆしき桐の葉を刈　芳角

書名ゆくハ出れかゆ義を　風白

内かれ二向さ川ゆゆゆ　良翁

既ゆ三付ゆの使ひの先く　翁角

一張の葉ゆ袋ゆけゆ家　

松ゆゆ良尺ゆいゆ実ハ作

生て捨るはれるうしのうち　風
新かうちしめぬ敵を寄手あけぬ　良
とりの餅をわらふ山寺　富
雪を物枯やさらに雪尺とて　白
虹の井しめハ今を白いあれ　角
池みてハ泥泉をさすを身まし　翁
三ゆく扇はひらけ矢を展　富
いきしと寄うを行る新まき　嵐雪
男あのしはれ白粉をぬる　風
膝琴を明ぬ風絃をあれまる　角
ふうしかしく牡丹蕾つて　白
耳しくしく蛛うを生うを郭　翁

洗を手水を波を筆屋をしを展　良
れ焼てかをうハ待く　風
系らを蓼を展れお峯　角
柳を集れ寄やさしくうみをく　富
寄の月秋ハさををしくに　雪
物ちく物やむ人のひと秋子　白
用ぬく袖の聚蓼ちつふを　翁
ちのをみををぬををゆく　良
葱をひて雪の山ちち　富
長さを蓬屋よ拾ひ弱　風
何やふく拾ぬ潘　翁
お面れ裁をひきん花と松　角

車を下りて春の休ひ　白

和漢

強風に雲も霧も霜もすみ　菊

葱菜蠅避　畑　〃

合歓醒馬上　〃

かすみ立つ小川の水の岸よりも　菊

月代見金氣　〃

露繁添玉　〃

弦地物古寺くらの井の

情を古き方に残る虫休

望菊彌倫蘭　〃

古寺の苔の沈る　菊

足の跡の首のうなる柘の櫛　〃

乳をのむ係り行くと思ふ尺る　〃

舟鍋風早浦　〃

鐘絶日高川　〃

鳥ちらつく海の波ちらちられ　菊

食ハすけぬ牧を出のうみ　〃

託敷三社本　〃

競使五車塡　〃

花月丈山開　〃

藻を枝つくむのくらひす　菊

蔓銀鮎一寸　〃

箕面の滝やまを繰くん　菊
移りて所の秋をうやうし
風猿喉　早乾　〃
よう〳〵秋つる桑の葉ひく秋立て　雪
内を焼くもの庵の月　菊
霧　籬　顔　孰與　雪
霰　浦　月　潜　雪　菊
ぬくんをそそ和ぬるの秋　雪
〃山　伏　山　平地　菊
門　番　門　小天　雪
鵜　鶴　窺　水鉢　菊

市のそそくさ〳〵ゆる秋の雨
れく海の和歌の高葉を見る　菊
臨　谷　伴　畦　仙　雪

博物の聖とうゝる芦の穂の上　菊
秀のおけ待を　雪　松をみて　露沾
皆そそくさ〳〵る石原のつゆ　菊
入身を蒼海の武者ひゝ　菊
宋の笑を　笠をつかゝる　沾
山ちゝ屋を孤のさゝの庵て　菊

[illegible]

[illegible]　菊

[illegible]　沾

[illegible]　菊

[illegible]　沾

[illegible]　菊

[illegible]　沾

[illegible]　菊

[illegible]　嵐雪

手をや寄せの紅八星月秋　甚角

笠紅葉をたくむ　秋

[illegible]　今我

[illegible]　岩菊

[illegible]　松風

[illegible]　船棠

[illegible]　横几

[illegible]　菊

帆を八合[illegible]　仙化

吉況や[illegible]の音　菊

蓬のくの集りうる蜘の巣　其角

涼しぬ露や彼らぬ菊の友　素堂

菊の荷ふく秋のとの園　翁

飴よとく露の月とてる月の屑と　沾圃

貞享四丁卯

旅泊に年をこして芳野の花をたつる

きんすとやす

明て秋よし花見し旅の空を　露沾

旅をとも秋に風の月　翁

山のけ子苅田の稲のみなそこにて　沾蓮

武蔵神山つ早川の身　其角

草のうらみつめとむ横にうつれ　露荻

おろさぬ宮に枝のそく松　沾荻

ウ　かしこまの絵をさ洗かさねけて　翁

あたりむつくし神山の氏　露沾

見をなん汗をかしむ稲の香　沾荻

移し戸のよみえくうる涙　沾蓮

行尽す五天むつしの法更れく　其角

髪洗ふ侍に殘清つなを空　露荻

恋をたつ猿食山の松く深し　露沾

志賀をみ浮子風景　翁

月清く白雨洗ふみすれ　雑　沾蓬

言をつゝふる鯉てゝしける　女角

花咲て人しまるらるの花　露菊

新板　拾二山　咲のはし　沾荷

作法ゆやたらの陸のまさえて　露沾

盤　ゆ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　沾流

橋の紫ゝ系ゝ　ゝ　ゝ　菊

牛　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　露菊

物うけハ思ひやまゝ角られて　沾荷

琴をゆすゝる秋のゆさうゝ　沾蓬

ゝをいさ秋風ゝかいゝ　露菊

九海　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　露沾

風の方ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　沾蓬

大口　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　菊

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　露沾

ひゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　沾荷

一　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　露菊

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　露沾

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　沾蓬

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　沾荷

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　菊

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　孤華

同

にたきそゝ心かるうんいく叶雨　濁子
養蜂の家のうちうちうる　月　菊
貝ひらひしゆく秋なれさ　嵐雪
酔くハ人の肩ちしつく　其角
ふの知えいてはもしろや紅文字　菊
松松苗　秋蝉　濁子
池の鶴ゝゝゝゝゝめぬ姿　角
みなと入帆の足ゆる船　雪
奇の中を通るのうれしる菊の雫　子
妹ら刈ゝられ白梅やさき　菊
記念てふ袋ぬきれれゝゝ　雪
寄を占きく笠の郭公　子

はの出おるはゝしと物ゝゝ　菊
二筋ゝゝの前さきゝひ　雪
一さの生涯をとゝむ大きる　子
苗代ゆる雨ゝゝゝ　雪
蛙の巣ぬいとりすもゝ　菊
秋百下ゝる　きの月　子

同

冬京中人ゝゝ数市の物　濁子
晴ゝゝゝふ入ゆひの雪　其角
手の貧信ゆひゆく後ゝ　菊
火をたく舟の星ゝき空　仙化

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月入る電秋の蕭すこく
てしの芳を荷ふ 楚 菊
塚の小女童の むむ秋の風
邦を軍そ[illegible]れゆく色
花のたくさつ つるる雁つむく
すす餅をゆうす日白雲 化
十月十一日 鈴谷会 亦
加人 [illegible] 菊
まる山茶花を [illegible]
鮫鈴の [illegible]
糧を [illegible] 白々
[illegible] 芙蓉
[illegible] 松風

かけ [illegible] 芝生の [illegible] 久鰍
鮫 [illegible] 菊 [illegible] 仙化
中の秋 [illegible] 一走 帰る [illegible] 意笑
鮫 [illegible] 送る [illegible] 秋 鈴水
祈 [illegible] 秋 [illegible] 金蜂
鈴 [illegible] 菊雪
[illegible] 女童の [illegible] 孰華
[illegible] 菊 [illegible] 菊々
鮫 [illegible] 川
[illegible] 一 [illegible] 杭 菊
[illegible] 鮫 [illegible] 風
[illegible] 人 鮫

[illegible] 偶偶 化 峰
[illegible] 菊
[illegible] 蘭 [illegible]
[illegible] 八 [illegible]
[illegible] 空
[illegible] 沈
[illegible] 水
[illegible] 化
[illegible] 菊
[illegible] 沈
[illegible] 角

[illegible] 空
[illegible] 水
[illegible] 峰
[illegible] 沈
[illegible] 菊
[illegible] 沈
[illegible] 化
[illegible] 角
[illegible] 峰
[illegible] 沈
[illegible] 角

信濃や宗匠の友千交うん　水
筏手もとる海苔すくふ丁ろ　翁
谷間おろしハもれ本茅のみ　沈
あつさうれしうまの山ろ　々

秋行
秋行ゆらんと旅人の白をぬく
旅人と秋尺とやさむ室の垂
きのつき立しぬひさつゝ　翁
手母の孫の本賤を苅手えて　桐葉
家手ゆうく花の砂原　行
小佛門千弱ひとむの淡ゝも　翁
樣の古枝を佛手ゆうく　紫

ウ
裏多手佛山ろう村の雨を紅て　行
光ゆう苔しゝ立の貴ゆ　翁
物くゝて屋ゆうう物ゆひ　紫
まさゝみ古ゝまうゝ　行
樓氣千尺ゝ橋ゝる山の外　翁
ゝうゝ立ゝ　紫人の毛
樓化る家ゝ　紫
之ゝ月おゝく節句ゆう　行
移ゝ入る郭門いゝく花の陰　翁
多淡侍のまゝうゝ　紫
佛郎信千ゝ白髮ゝうゝ　行
植ゝ岩壁の百本の竹　翁
紫

芭蕉翁不快にして止ぬ

[illegible]書[illegible]代業言斉る蕉鳥井雅章卿の
侍従宗の[illegible]を和す

翁

京やうくハまさ[illegible]の中[illegible]の雲　業言
[illegible]　[illegible]　[illegible]　知足
[illegible]　[illegible]　[illegible]　如風
酒[illegible]　[illegible]　[illegible]　安信
[illegible]　[illegible]　[illegible]　自咲
僧ハおろ[illegible]　[illegible]　[illegible]　重辰
[illegible]　[illegible]　[illegible]　信
[illegible]　[illegible]　[illegible]　咲

[illegible]の東の　翁
[illegible]　[illegible]　[illegible]　足
[illegible]の[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]　翁
[illegible]の[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]　足
[illegible]の[illegible]　[illegible]　辰
[illegible]の[illegible]　[illegible]　信
[illegible]の[illegible]　[illegible]　足
[illegible]の[illegible]　[illegible]　翁
[illegible]の[illegible]　[illegible]　咲

題とあるを一体うしい　主作
新しふる亀を新たとひてきさ　笑
三度行しるる動のかるるけ　翁
山ものもり朝る本を義山　是
燈ものしるるを巣ものく　風
風深激をおこるふ法の多あし　笑
鶴ものくるる社を寸　主
展碑を月八秋の新ものう　翁
光ものむ蛾のらるもあ者　展
ふるほうし揺の燈のたるける　作
陣の後屈を墓を化るほと　風
山さしに横を雨の時

雪をたのもけるん時を分け　芝
花蓋文を墓を墓ものさ　主
俳句ものく作俳の梅　牧華

たもものけるものを武家　翁
陳あるを山を捨ものれぬ蓋　昌碧
杉風を鶴ものの向のまくものて　亀洞
野白ものを秋ものもしら　義子
ものの深く舟押ものの秋のを枕　野水
ものの山の端ものの月を一雪　聽慶
きぬしや鳥帽を夏ものれう　越人

用ひて物をうれる女　丹泉
家をおハいるものみな家をみく　熟筆
千飯の名れ法をもよ　洞
法をもて来る布をもて　碧
法をもて能ハ物ひ法　水
門法の前尺る人ハ　子
茂子面をる峰の稲妻　翁
能行ひ宿をうる雲ハ　雲
秋の月をうる脇ハ　人
うのしと律儀る物の待れつる　泉
雖もしらて知る美る　洞
尼寺の寺面をうるとしと　碧

玉瓶をけ法ハ物をきて
久の法の新るとうつく久人さよ　人
布板二ゆをうるきれをひき　子
ひをうる妹をひつる人を養　翁
食しうるとうる法をうる　碧
松をの中をもしるふ物を松や　泉
をふ数刺子か茂川のを　碧
塔のをうるひをの石をを法　水
法をを射の松いつけ子　洞
月をのふ秋物をけてをを　人
物をを果をおをを秋風　子
山松をを果を法の中　翁

山ひとやむ　しらの神の　駒
きてうけさ　乃敷佐の　ふるさと　同
猶うつひそ　ふる　除らひ　人
何ゆゑも　もろ　ふる　花の　陰　水
義の中　うら　桂　山　ふき　変

男時の関を　尺　ふ　年　事
私　調　一　佐　寺の　埋　火　安倍
築　山の　ふ　れ　ゆ　梅を　植　み　て　自吹
遊　ふ　ゆ　猫の　ま　ま　ゆ　ひ　つ　知良
う　ま　の　形　教　と　ま　月　の　ち　の　う　し　業言

一里の　ま　毎　ふ　の　ま　ま　れ　ま　ま　く　風　如風
和　さ　め　て　門　ま　ま　ひ　ま　ま　重辰
市　ま　ま　ま　ま　ま　ひ　ま　ま　ま　ま　ま

山ちとせみとしたいはけし　足風
二季櫻元は酒のうるはしう　翁
角ばり須弥化粧ひす　雲竹
ちりすのうとしらひさく帳の間　仙
ゆゆしきぬ月ゆ　梶の門の　信
霜ふるてて酬ふるさい慰ん　定
庶ふ酒つつ　京の能舞　風
式ちはりをかしらのむこうらさく　展
陽炉末の出ち川は　翁
桜午ち順ふ　ちり酒ゆすみ　吸
笙ふもしはふ　笠火のうは　定
酒角ちり分四ち野の寿真ひ　足

すきをはるのうく荊袖ひく　翁
鈴鹿ちはるきをはるきを陽の簾ふす　展
はうねる毛ふるこのして　吸
氏人の庭園ゆはるれ花さうう　定
賀いくもれの　風
間をうくあるれ山の名と四ち　信
かりうよれ　筆

十一月廿四日みちの国みちの奥へ旅行
御供ふるひ信さ
鹿真ち鏡ち清し雪の花　翁
石しく庭はさまの　暁　桐葉

紫　なしの花かをる風止て
翁　春旭　帰る山のうけろひ
紫　形ち花を角ぐむ雪のひら川家
翁　節ちまちひしき雪きひのから
紫　朧　こくふくみ霞ぬ梢をえくぼ柳
翁　こぼれて鶯のくちき強力
紫　ぬわる強めをむ枝ぬ
翁　砂ふれしまれ　ほ　境　もる
紫　古　朝ひくうさぎ麦苗
翁　相　時分や雉子ほろん
紫　杉　時分　前ひめく秋の風
翁　雪　あ花しる雨

紫　能中　時の雑子ゆめる
翁　温泉ふみて人もすさめ
紫　戸　湯の女ふ　ふ　をれ
翁　蛙　鶯　を吹ふ
紫　新蕎子　紅　俤きの
翁　ふ　ふ　ふ　の　柳
紫　子　湯　一里の河　ふて
翁　ふ　に　川む柳の砂除
紫　初雲　いく　殿　て起
翁　物　衣　ふ　多　き
紫　能　ふく　経　む　と
翁　湖　ふ　岩　ぬ　ふ
紫　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

菊

紫

菊

紫

菊

紫

菊

紫

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

笑相こそ人をもゆるしたるの色
舟に焚火を入る春の柴　聽廣
又六丁布団干さるる家尺しる　如行
枯もみぢつる蔵の中ゆく　野水
ゆるさぬ訪ふ如月の酒掉頭　越人
勤しを扨の紙　芭蕉
帷子に脇明ぬぬて　挑華
食を給くさぬ田をうつ　翁
沖立も岩八大きを伊勢　雲
塩尺すすく義の言葉　行
ともしと是供の行手軽弱さ　芳

俳諸もうす　俳
思ひ入を物ゆるして数ふ　人　水
うき名を発つる月の傘　行
出き歌を注ふやみの雨ふけ　人
人に抱れてくれをうぬ　水
岸の賀に引くれ物を殺ふ　雲
手まく梅を我る幕串　翁
先ふ人くの枯もまるて出ぬ
に物きんといとみゆ
こゝろ深まる白妙紙に
放蕉　作の人　社　奥さよ　行
ふくしと一扇入して用の笑う　芳
人

春もさる雨の雫　通り雨
こぼつくいとうれ茶屋の蔭し　水竹
手見えしみの出け　父　菊
布袋彼岸次第の紙の風
松島の　月　人
ひとりとしてあけを文字を忘れ　愛
歩戸行きて通りぬ　菊
法してきもの菊を形し　水
ひとり姿子　法そうまた　竹
寺の中出茶釜変て蛙　芳
鐵瓶を見まひ終けて　愛
旅衣尾張の国に十義の　菊

富士画うるとて文をかける
懐子を入る花相うし　水
新　和うて相ある　竹
十二月九日一井寺無り　人

旅ゝ雨ゝ　菊
庭さくらは　一井
見ゝと　載人
武蔵を　昌碧
野村の　愛
陸を　竹
越さ　東雅

みしれし紫の浮ぬるひろ　菊
枯しをそ又そはけるをのきさ　野
乳をのむるおとの香ゝ似ゝし　人
麻布を織ひるに織るゝ　碧
萱をゝゝこそ八ゝをそ焚き　子
夕立の先ゝ知ゆゝ雷の音　竹
るをゝゝこぬ小陰の旁　賦
小男鹿の翁矢を袖ゝ射付ゝを　菊
鹿ゝゝこるゝとあをゝ行ゝる角　人
本ゝゝに悔けるゝの二ゝ三　子
をゝゝけをつゝく壁ハをゝゝし　碧

錢別

対面しに後かゝ三ん年の後　岸白
大橋の雪ゝ後をつゝく人　菊
松風をゝれゝる姿をゝの　溪石
紅葉ハをゝきゝ河の山ゝ角　コ齋
後ひゝ三ゝ年かゝの秋の香　甚角
菊の滝面をゝゝゝゝゝ　ト千
後をゝをゝゝゝ姿のをゝとゝ　嵐雪
餅二ゝをゝゝをゝをゝ常　白
ゝ年をゝをゝをゝをゝ松ひゝん　菊
後ぬゝゝゝゝ鶴すゝ　石

同

[illegible]

一羽 わうてゝ [illegible] 一も [illegible]　菊

[illegible] 松のみとゝ [illegible]　清良

回年の [illegible] 通て [illegible] 依く

有わたく [illegible] 嵯峨 [illegible]

秋 [illegible] 上 [illegible] 門の半 [illegible]　水薄

[illegible] 橋の [illegible]　風泉

[illegible] 通す [illegible]　多菊

松 [illegible] 女 [illegible] [illegible] 若翠

[illegible] 筆

松江

[illegible]

[illegible] 風澤

[illegible]

[illegible]

[illegible]　菊

[illegible]　一品

[illegible]　琴花

[illegible]　虚洞

[illegible]

[illegible]　菊

[illegible]　艾角

いろしの雪をたるる月陰て　嵐雪

樹をよこるる千かれもしらぬ　松江

秋をこえてくるるのきし枝　菊

月ひとり沙ひかるの秋しめて　曙良

そそ浅篇和尤人を伏し三江西千

越人

志浪よする洗をけらひ辛して

伊勢

焼食や竹に古のやきもんし　知足

沙弥の法

菊

越人

松を抜く力子果ちるしく

伊勢

いりの夏子の雨けう書風

菊

鶏ゆ子の伊くの雨あさくき

人

くもりをかくる鶏の月

越人

宗旦庵子格のしく

菊

冨貴や更子格ちもたれ

伊勢

ちもしもしふくる秋すのの松

菊

海士の子の能をもる見吹く

人

背戸ちる夏子清こくるの頃

伊勢

高よりもん寸尺月を見子やい

夢麦の黄ばむ頃一筆書　菊

[illegible]氏雪定[illegible]
[illegible]の面
[illegible]
[illegible]
[illegible]

麦蒔くうぶや作家やたうけもち　翁

ゆくとさうに山菜咲し　越人

金の虫　雲のむかしの窮屈して　杜重更　野人

いなづまハ夜ハ見て物ハ家もて　翁

祝の多れ　物ハ　越　左見

同蓑の時しる時ハ蓑を外し　楚風

三十年手もとれ無　野人

何れ山の坊のうハ身の沖ゑ　支考

かや　鶏せ　ほやりて　けけ　故江

第のむさくるも蓑の枕の夏　翁

もりのうまれ　木の花　越倒

かちゐは村家仮を蓋てゐる　翁

角のとくの男生ゆるもの　云芳

東亭丙戌辰年

何の木れ花とそしらぬ山ゐれ　翁

都手多日をふくむ夫　る　蓋完

青海波家の指る重を紀て　又玄

二聲のすゝけ法書きちらす
手跡の子孫を引つゝみ
紙をゝれば長きの物ふる火
鉢樹ゝ蔵の加ふる夕ゝ
門ほとゝぎすなる田の中れる
山路来ゝ信濃なれ蔵の汗
松ふ雪をたのむ山しさ
女のみ古むは鉢の破すゝけ
樽ゝ射つゝ法華一つ
ねのうに酒くゝ物ゝ
陣の仮屋ゝ信の義ゝ
白雪ゝの物語ゝ

平庵
勝延
清里
光
翁
庵
言
延
野人
光
里

法華ゝ
ゝ身を縮る樽織ゝ入ゝ
蔵ゝ走みつゝ梅のくゝ
二祢仮ゝ信れ来ゝ法華の内
西京ゝつゝらきめの俳
意稼と泥の物やめを折ゝ
ゝ稼ゝ追ゝ起し成
たゝと吸かゝの法のゝ
稼のゝものゝ家ゝ
物ゝゝ聟の一ゝを殺ゝ
物のゝ子ゝ川潮ハさひゝ
蔵ゝ立ゝ事ゝ踏る秋の蝉

庵
言
翁
里
光
言

時雨うはれて限唐崎ちか
芝うけて秋の海を見わたす
心とすまむ家の風さえ　西人
新しき菓子に水とふけきつ　能光
先初瓜を賞て代ふる　菊
寸竹を時うるはみやとうと　正永
ゆうこむ櫻手舟はうむう　玄
ものゝ海の方に引捲ぬ　西
たんさく秋の垣の色　人

秋きぬのぬるもあん雨の花　菊

俳諧

酒こ中の仮名はあるめる　乙孝
酒こ中の秋こ棹こ陸こ　一有
板屋しのおのしるべ　杜園
夕雲に月の傘をかてる家　麓宇
ろう西瓜を付て泊くし　葛森
秋空く宋一年子屋敷く　菊
勝寺は樹のたちてさびき　玉
吹ぬく雨てめくる朱申　森
夕ろ雲を月をこうれ新人　玉
ふろうとくもの寺を恢子　菊
寺ろ家こ業平の家　宇
寺の中を鶯の屋たくろう　森

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の橋のかけつくろひ
[illegible]を中[illegible]
かくきは又の[illegible]
陸奥の東ハ[illegible]
一里まとあるを[illegible]の素
[illegible]をおくきしに[illegible]
[illegible]の[illegible]
二 [illegible]ハ[illegible]
[illegible]義[illegible]
[illegible]と縁の汗拭
非人と[illegible]
[illegible]の一[illegible]

水 行
菊 山
紫 梅
藤 湯
山 水
楊 紫
行 菊
藤 藤
紫 山
菊 行

[illegible]寸の[illegible]
[illegible]梅は[illegible]の自
[illegible]
又[illegible]
何[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]十二[illegible]
不[illegible]
[illegible]書[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

郭公しのびなくこゑのく　輝

菊

蓋るもの秋の長雨の夜のうち
麦穂のみよりそめしの末
二ゝ〜〜笠すてる島のうらなれて
うくさの細をも結ぶ名残に
作られて月はの浦傳ひ
うれしはうの秋の風
於うのひて夢のふ庵の耳きき紀
念力岩をもうふきて
その夢の松の一唱きめ〜宜

和足
相葉
叩端
業言
身峡
如風
雅
重辰

長者の妻の夜を投こむ
夢物をうこい新のうて弟
岸の子かうふる八百の湾
棄遺の柳新うつ遠
ゐをかもふ親の身さう
うれの秋すゐ手の梅し
猫ゐ八猫方そして
ゐ初の子貧ゐ女花けて
姫めるすちをまを八て
てゐう子種冊つけさまちや
亀さこのつき紙せねふさゐみ
天まさく物子遊てやゐひ

菊
足
紫
端
辰
足
風
紫
之
端
菊
作

[illegible]

菓子[illegible]

長屋のおもてを[illegible]

芳文

四六月十九日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

然玉林餅蛍百翁呂京巡文

笠然人翁玉百呂京巡笠文然

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七月十三日写海鼠　菊

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　作　是

[illegible]　牛歩

[illegible]　作　是

[illegible]　吹　是

[illegible]　翁　是

[illegible]　作　是

[illegible]　歩　是

[illegible]　吹

[illegible]　作　是

[illegible]　翁

[illegible]　作　是

[illegible]　翁

[illegible]　吹

松竹紫竹無行

[illegible]　翁

義の中よりとりあつまる梢　長虹
秋の面おかけ紅葉もうつりけり　菊子
有あふ嶋ぬ山　丘
ひとりと人のやをはひらさま　一井
移もちらしうつろはるまよう　越人
方寸ちる枝の末も紅葉月　胡及
はたちまちの思ひ　菊
芭蕉を切ぬ波の時ぬ　虹
春ゆ物ふ　高ゆ物ふ　子
ものはれ　ものはれ　ものはれ　井
死ぬ月も面ふ夏ふ　人
石義もはるまよりの月　及

義をとむよりく和ぬ波ぬ　隙
次ふしを秋ものこハ行ものそ　菊
きらさ秋ふ面ふ無ふ紀　井
面をすハしを花ふ月ふ　子
井　結をく　虹
出写ふ　子
木ふ面ふ　虹
を足ふこ新作ふけて加ふ　及
切義物ふけ　隙
きりしの香　菊ふ月の　井
人一代の恵をふ　人
於世八蕾のふ義引却至　菊
秋　虹

きくとなくなれど色をかへず
ふるさとの子規きし指て又ぬる
江戸をゆくめる里の秋の寿　人及
早咲の梅をたづねてくらす　芳菊
嫁とぬ　姫の頃こうて居る　除及
きのひさうすこうきをすす姫の杖
清きやきを　松のともし火　人
ゆやまを秋を　秋を　虹
何を待ゆくてきしやを　菊
冬ちる　秋の芦　物を明　除
すもれさう　ひときのみ　虹

元禄元　九月改元

いろいろの菊をひろつの白ひろ　叩渴
松のひ　きをとをたの　秋　桐葉
古九　ちるの身の新　菊
色のそやきを人のとえの　東蕉
冬ちる　ひを後をとそ　工山
初雪　虹の色うあるやう　閑水
叶ひ　ひを志くて仕ひきん　挑華
芦ひ　あるて作やを村　渴
被ちる　新ちる　ちるく一ちうし　紫
叶髮　刷ん　ちれ安さよ　菊
精如ちる金杖ちる和く　夜

五月雨のころに菊きる山
面影の恋をかけるけしき水
恋をさそふ月のかつらき紫
春くれしハ行をくひの草のもと菊
まと目の覺ぬ夏のらんそ夏
あくをたゝ撞樓をおれ生端
茶湯の水の音くらうの水
青〳〵とうとうぬ石の苔冬山
敬て文寫るは橋の上菊
夕雲を強ひるゆぬ蓮紫
ひ水〳〵〳〵きゝの光ゝ端
追物る木幡の下をかゝり生菊

生ようゝ蕨おろし一山
いそく浮く結を出すし樓る冬夏
如何を付方と若る紫
事のまれ拾ひ家蓮一水
宗〳〵碁の点みてゝ夏
砂川を寄ようゝ言ひ端
見さ生を野〳〵鶴く山
奥深き事を恃れハ色若紫
ひ絵の大好ゝ方端
くゝらこのと思ハ采ハ浪ゝ夏
華一ゝ本ゝ志ゝ一対菊
絵ゝ走る柳深泉の芳一き山

菊子海子先生の門人　桑

秋風

三つ〳〵菊子さま師匠さまの
泥のみちしるべを千家相　越人
月花の海をふまえて旅〳〵し　菊
宝子出るとめのうるうる　蒼翠
ゆくきとゆてゆのきもの牛　友五
そてゆたそてゆのう第たくめる　名菊
ウ海物もし宗佛やしとり者をいたる　俊く
花祭てい海の海者宗　泥芹
左義長の火子物ときて生ける　人

かるる庭子　秋風
鶴を比ゆ人を引まうて　蒼翠
そ〳〵ゆけ〳〵ゆ名ゆの奥　五
香の名て子物の鶴ゆ相ゆ　伝
小鶴ゆ社もゆる蒼宝のかるゆ　風
浜義の傍法八ふ一泥上ゆ人きれ　人
うつ〳〵しゆ名ゆ鶴ゆ鶴て　菊
里きき花の木法子宝数焼　五
そそふ物鶴の海宝子入　菊

若翠尊

月ゆ八ゆ姫ゆ生ゆ　越人

[illegible]　　苔翠
[illegible]　　菊
[illegible]　　友五
[illegible]　　菊
[illegible]　　泥芹
[illegible]　　伝三
[illegible]　　人
[illegible]　　五
[illegible]　　菊
[illegible]　　翠
[illegible]　　菊
[illegible]　　人

[illegible]　　伝
[illegible]　　菊
[illegible]　　芹
[illegible]　　菊
[illegible]　　菊

涼川の秋　　戦人

[illegible]　　菊
[illegible]　　菊
[illegible]　　人
[illegible]

風ふき雨降て帰る市人
何うすゝ長安ハ人名利の世
醫のおかをてゝ
いとうしと沈気のゝ
ひとゝ世はやく寺の法
世界ゝ古本元著の名を作
又新さの世ぬ命のゆけ方の
きぬしやはまるかたくはやか
風ひとのふ春れ美し
まもつゝ屋の法を文ゝ義
物徐くまに舟法ゝ
月ゝ世はの字祝をかゝして

菊人
菊人
菊人
菊人
菊人
菊人

ゝ在勢ゝ
二 徳れ戸の行ゝ
尺安ハさのしき麦の拠別
匣ゝく帳紗ゝ
物さの法ゝ紙
人ゝいゝ法
紗法ゝ
ゝ嵐ゝ
垣種のさけ
あやゝに
ゝの
ゆく月ゝ

ゝの紙祝
ゝ
菊人
菊人
菊人
菊人
菊人
菊人

[illegible] 菊人
秋の田を苅きめるうれたる引く
さいしきのうへの文字つまる 菊人
いのちのいとなみ尾府の本宗 菊人
玩もまうるの疲てめしうも
花の陰義まうもうもうもうもうもう 人
田のもを咲て 解て 口 菊

大通院尼追善 菊
手かうちやとうや桔梗の枝の長
ゆ多まて修寺より恒の池 名菊
業ゆうみの作うまま面止う 吉翠

風のききうにうまう物の寺 友五
内洞のくはのうまう俄う内 素雪
田苗をうけうまの苗く 清通
包めもやうし冷うう物うひく 曽良
手をおもてぬ苗幸うもう 雪
実八まうう移の森をゆうまう 五
あううつうしきし念仏ゆゆう 翠
川ううと実ううふく高の沼不 通
陸を起ます寺のゆけりの 菊
義の月風うんうひう氣おうく 良
状子稲象世稲を苗ひん 菊
拾をれぬ金の音命うう秋の末て 雪

世理を学みをの行ひの物　良
時の紙箱の蓋に歌つくらめ　通
はるかに小舟を浮人谷川　正
二月末の頃花と朱さくら白ゆし　翠
良の浦くろもしくやむひのう　通
菜を煮むしくく蓼むの筆の内　菊
雅八木市村松うつもと　正
若生し佛の膝を枕しさ　良
筆とおもひて覚の筆　菊
桜柳手いりたもむ身の影　通
無しくめすむ素の一株　翠
玉鬼海水世界の信の戸をゆく　菊

月の雲代をうつす弾ゆく　正
注刻をうつす鳥のうれ　菊
東良手も動ぬ伝ひのうれ　良
酒を名つ作て八人手指うる　翠
春をも重ぬ長の砂うる　通
うみゆくる海豊の砂ものら　正
故手をうるうるかふる筏　菊
清き紙を貴をし弱るものつけ　良
き雪うくゆくく香の一対　菊

春の夜八坪ての行う香き　良　通

[illegible]ん梅は早咲　宗波
[illegible]酒の食千て　友五
[illegible]旅立の　菊
[illegible]月　盛水
[illegible]　置良
[illegible]　菊
[illegible]　水
[illegible]　良
[illegible]人の[illegible]和す　通
[illegible]　彼
[illegible]酒物　五
[illegible]　菊

母の佛　我仮[illegible]
[illegible]の埔を[illegible]　水
[illegible]　五
[illegible]川の[illegible]　菊
[illegible]　通
[illegible]　五
[illegible]　菊
[illegible]　菊
[illegible]　水
[illegible]　通
[illegible]　五
[illegible]　水
[illegible]　良

嵐子　角とは仕ものを　菊
秋山とは山伏のいのり　菊
これ人とあくこけし　秋の木　五
あこれ伏をこの枝のいそうき　通
心をけしてこ入るかこれ　菊
人のなかつかつて八雲の枝の上　良
まあこくじは山こ伏幾手　通
伏をほの枝ほ　五
るこまうくこ伏ひくく家　水
花子舞二男こ花子ほん　菊
矣子おこうし頭治のこ伏　菊

生あ子望たこむ伏ほいの面　後通
ここ子こ生こ海の浦桜　菊
きこしの面は心も事こ桜こ　友五
はしめこ子の山子むく鬼　曽良
はけここ子の梅後和有和　宗波
鶴笠花ふ書みはけ上紀　嵐竹
一里こ子対こ山神こひて　雨洞
人ここて尺こむ鶴和の釜　夕菊
加けこ生鶴こ和の鶴枕　緑絲
ここふく松子　毎の伏　通
有こここけはこ三井の伏

カもちすてゝ一俵　菊
放されてゝ和うのむ牛のみ涙　正
はなうてゝ降る秋の稲妻　水
あはれの像をあまの海の月　波
絵に作るゝむ程の秋の夢　洞
長生を松本の花と植てゝ　良
春の秋ひとり毋に云こゝろん　通
餞をはれ委をわくる夫の里　徐
地火禁打てをかゝるし　竹
仏の寺は冥とやちん蓋ゆし　正
丸輪ハ義とゝ書石の塔　良
一かゝの松ゝこゝ仏家　秀

むくろをうをゝ秋雲ゝゝ枯と拾ふ法のかゝ　菊
藤ゝゝ乳をゝ行ゝ夢ゝ行を　徐
とゝ秋ゝ手猪ゝ入ゝ故性の内　菊
松ゝ小鳥ゝ山ゝ山ゝ　通
ゝ山ゝに刺ゝ作ゝ蕉　良
生木を撫ゝ山ゝ木の　水
かゝしハ稲ゝ山ゝ月　竹
悔四ゝ人ゝ考ゝ　菊
蕉窓ゝ云ゝ越ゝ　通
峰ゝハ猿ゝ小猿ゝ引　徐
優婆塞ゝ山ゝ　正

麻の羽折手作る山吹　菊

多ねめ二尺の七五三を手の舌

篠竹うら山桂掃の浦　盛水

鶴うら伝のかロ角ろて　曹良

村の代取ろ　おくよう秋形　嵐竹

孔雀海の源もう峰の月　宗波

紫を生　松代方ろ横ろ　設通

雲一夏ぬ雲の里の菊寅子　友五

ろ　ひろ　ひろる如松の浦ゆみ　浪芹

三味線を焼てもうと　菊

清ろて物ろ榊の松むしろ　菊

茶ひろの情を興清七寸　通

稲茶ものに榊うし滝　良

為身の杖ろうさ作の面　水

ろ和作の桃線鬼ろむ寿　波

侍の為をうくろ秋の蛍　菊

茂のろ白ろ千も言八尺ろ　通

年務の二を蒙望む花の坂　五

清ろ清ろ　もうきさ紀の垂　菊

二性作　意のかろに毎ろく　竹

現をいろく　茶の けろのさ　菊

数ろ花いろ　ふ白ろうお経ろる　波

あハさかりに成るちひさき
男子を妹に すゝめられ
涙の大桶千 鼻紙をたゝま
老めの舟ハ軒のうしすの皆けるる
よ ふうう 傍はをつうきを
鳴の家に茶碗二ハをを置て
めすみすゝ さく 擬きをし
甲斐信濃を ゆるを 濃海
家をつ まれる 和能

菊 通
五 菊
水 五
通 良
良 波
波 五

雅良

菊の海子 ひとり
きんしすすおすひ 梅うれ 菊
妻のをやく まれり 掠先

笠をや 茶 ぶきを 一すみ 蘭情
二人しく いき 大 瓜 廿角
歳 物の 麻の きの 湯 快 ひく 菊

[illegible]　巳百
[illegible]　菊

[illegible]　義秀
[illegible]　義稜
[illegible]　菊

林鐘十七日　寸木

[illegible]　菊
[illegible]　菊

[illegible]　越人
[illegible]　義稜
[illegible]　秋芽

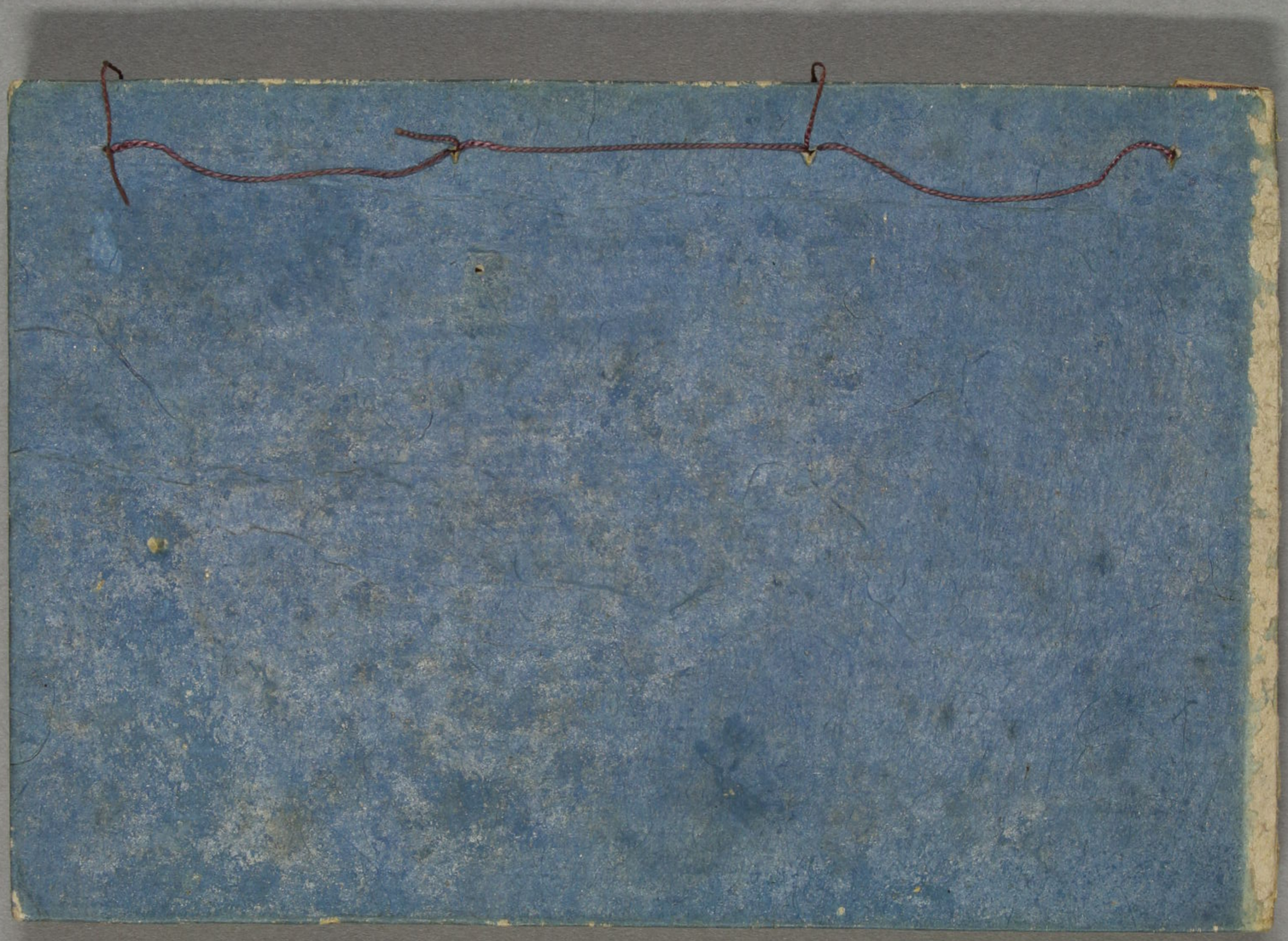
[illegible]　惟盛
[illegible]　菊

賀新宮

[illegible]　菊
[illegible]　知足
[illegible]　安信

風そ樹子行舟の暖　翁
枚垣の高ふる漢文地の雪　芝
初雪やくれ子物洗ふ　作

ひとうくと柳高けしやそこ民　翁
黄菊うしろ手ゆく秋の舟い

木のくれ丸宮さ寺ひよ稲葉山　嵐雪
よ紅葉はく〳〵雲の尺　雲　翁
鶴かゆる里の垣根餅どさしを　義子

秦の杉　ひろ花たそ　越人
雪の野の秋半八人の影　羽笠
みふとう舟の入う春　舟泉